



学生数/約32000人
 学部/文、経済、経営、法、社会、理工、国際、国際観光、生命科、ライフデザイン、総合情報、食環境科、情報連携
 大学院/文学、社会学、法学、経営学、理工学、経済学、国際学、国際観光学、生命科学、社会福祉学、ライフデザイン学、
 学際・融合科学、総合情報学、食環境科学、情報連携学
 ▶THE世界大学ランキング2020/総合1001+位、同日本版2019/総合73位

狙い 派遣先で発見した課題を学内のリソースを活用して解消するインターンシップを実現し、学内に往環型の学びを浸透させることによってグローバル人材育成を推進する。

経済同友会インターンシップの流れと参加者の声

	5月 エントリー	5~6月 書類・面接 選考	7月 事前研修	インターンシップ	10月 事後研修	11月 学内成果 報告会
	参加希望理由、派遣先で学びたいことなどの書類を提出したうえで、思考力等を測るアセスメント*を受検。	提出書類、GPA、アセスメント結果による書類選考。通過者は15分程度の面接を受ける。	派遣先企業の事業内容や質問をまとめた課題を作成。目標設定、グループワークなどを行う。	インターンシップ	事後アセスメントを受検するほか、各学生が研修内容、学び・気づき、反省点、今後の課題を発表、ディスカッション。	各企業担当者、経済同友会担当者、学生、教職員、派遣学生の保護者などが参加。個人発表とパネルディスカッション。
	社会学部 メディアコミュニケーション学科 2年 横山未来さん 【派遣先】花王株式会社	社会学部 メディアコミュニケーション学科 2年 横山未来さん 【派遣先】花王株式会社	経済学部 第2部経済学科 2年 篠田実沙さん 【派遣先】株式会社キッツ	経済学部 第2部経済学科 2年 篠田実沙さん 【派遣先】株式会社キッツ	情報連携学部 情報連携学科 2年 福井隼さん 【派遣先】コニカミノルタ株式会社	情報連携学部 情報連携学科 2年 福井隼さん 【派遣先】コニカミノルタ株式会社
印象に残った研修内容	さまざまな大学・学部の人とチームを組んでマーケティングなどを実習。同年代なのに考え方やスキルが大きく違うことに衝撃を受けた。	人材採用のサポートを経験。企業が求めるのは、自身の経験を仕事にどのように生かせるのか、語る言葉を持つ人であると感じた。	プリンタ開発チームのプログラミングを経験。個人作業が多いとの予想に反し、チームでコミュニケーションを取りながらの仕事だった。			
気づいた課題と取り組んでいること	人事の社員に「企業を喜ばせることより、自分がやりたいことを突き詰めては」とアドバイスをもらい、就職活動への固定観念が揺らいだ。幅広く授業を履修するなど、枠にとらわれず自分の興味を広げたいと考えている。	人前で話す力、簡潔に伝える力の不足を感じ、後期はグループワークが多い授業や人前で発表する授業を履修した。また法律やビジネスの知識を補おうと、ニュース検定、ビジネス実務法務検定、簿記資格に挑戦している。	最新のプログラミング情報を得るには中国語ができたほうが有利だということがわかり、早速大学の台湾留学にエントリーした。派遣前に比べ、行動力や質問力が付いた。			

*GPS-Academic

学生に聞く! 研修先で得た気づきが原動力となり主体的に授業に臨み、新しいことにチャレンジ

「経済同友会インターンシップ」は、経済同友会インターンシップ推進協会が産学連携による人材育成を目的に実施。対象は学部1、2年生、原則4週間、正課として単位化が必須という特徴を持つ。東洋大学は2年生向けの基盤教育科目として実施している。2019年度の応募者数は約100人。書類、面談、GPA、思考力や学習姿勢を測る外部アセスメントなどの多面的な評価によって選考された11人が各企業に向かった。

上記の表にまとめたように、研修を終えた学生は新たな取り組みを始めている。派遣前後に実施したアセスメントでは派遣後の自己評価が全体的に下がったことから、客観的に自分を見つめたことにより課題意識が芽生え、行動が促されたとみられる。

「社員との交流で、多様な働き方や仕事の意義がわかった」(横山さん)、「仕事に完璧はなく、より多くの積み重ねだと学ん

だ」(篠田さん)、「エンジニア職は孤独な作業と思っていたが実際はチームワークだった」(福井さん)など、企業現場への理解が進むだけでなく、授業に臨む意識も変わったようだ。

横山さんは社員の「チームを引っ張る力がある」との言葉を受け、グループワークで意識的に議論をリードするようになった。「伝える力」不足を実感した篠田さんは早速プレゼンテーション中心の授業を履修した。福井さんもグループワークでコミュニケーションを重視するようになったという。



終了後の学内成果報告会。「学外の人と深く関われる」「コミュニケーションの重要性」「人生観が変わる」...各自の気づきが並ぶ。

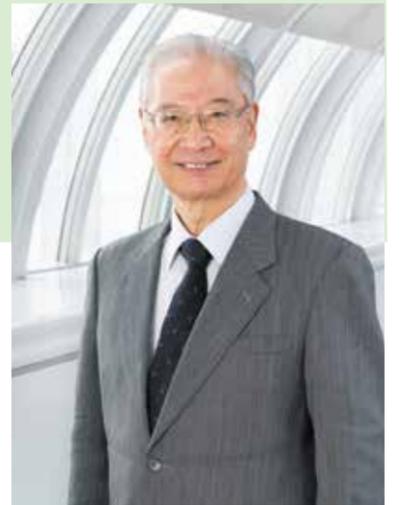
往還型インターンシップ

グローバル人材育成の柱としてのキャリア教育

CASE STUDY

東洋大学

人材育成の3本柱の一つにキャリア教育を据えている東洋大学。産業界と協働し、派遣先での気づきを大学での学びに生かすインターンシップを開始した。



学長 **竹村牧男**

たけむらまきお ●1971年東京大学文学部印度哲学・印度文学科卒業。1975年同大学大学院人文科学研究科(印度哲学)博士課程中退。同大学文学部助手、文化庁文化庁宗務課専門職員、筑波大学教授などを経て、2002年東洋大学に兼任。共生思想研究センター・センター長、文学部長などを経て、2009年より現職。

人材育成は哲学、国際化、キャリア教育の3本柱

社会に役立つ実践的な哲学を旨とする本学は、地球規模の視点から物事を捉え、自らの未来を切り拓く「グローバル人材」の育成をめざしています。2012年の創立二五周年を機に人材育成の柱として哲学教育、国際化、キャリア教育を据え、2016年度のカリキュラム改訂でこれらを深化させて参りました。

そもそも、大学教育の全てがキャリア教育ではないでしょうか。現在、大詰めを迎えている2021年度のカリキュラム改訂では、「Society 5.0やSDGsへの対応力」という視点から、社会構造の変化を見据えた教育へとブラッシュアップする予定です。中でもキャリア教育には、これまで

「教育の実社会との連携」で社会に役立つ人材育成

個別の「支援」にとどまり、全学一体の「教育」に昇華されていなくという課題がありました。市民意識や学びのリテラシーを教える科目群の設置、各界トップを招く正課外プログラム、学部別の独自科目の開発といった取り組みはありましたが、それらを有機的につなぐ体系的な「キャリア教育」がなかったので全学の意思統一や好事例の共有などを行うキャリア教育連絡会を全学カリキュラム委員会の下に2018年度に設置。人生をよりよく豊かなものとするを目的に、育成する能力をキャリアリテラシーとキャリアアコンピテンシーに分類し、あらゆる授業・活動を通じて培うものとししました。現在、これらを基にした「キャリア教育ガイドライン」をよりどころに、各学部で新カリキュラムを設計しています。

新カリキュラムの構想の中で着目したのが、教育的なインターンシップです。入門科目や事前・事後研修などは整えたものの、教育的な観点で中・長期型のインターンシップを行うために必要な企業と協働するノウハウが乏しく、理

論と実践を兼ね備えたキャリア教育を構築できずにいました。そんな折、経済同友会インターンシップ推進協会の協力を得て、同団体主催のインターンシップに参画することにしました。低学年で原則4週間実施するため、得られる気づきが多く、その後の学びに生かせることを期待し、全学統一の体系的な「キャリア教育」として有効と判断、2019年度から導入しました。本学では教育実習をはじめ「往還型」の実習を推進しています。これは学びの過程に実習を組み込み、実習で気づいた不足を大学に戻って補い、また実習に赴く...を繰り返すという学修モデルです。これをインターンシップに適用できると考えたのです。

派遣を終えた学生は自身の課題を見つけ、これまでの興味、関心と異なる分野の科目を履修したりなどしているようです。まさに、「往還型」の学びです。学生が自分の課題に気づき何か行動しようとする際、大学のリソースを上手に使ってほしい。インターンシップはそのよい機会になり得ます。「教育の実社会との連携」を通じて、社会に貢献できるグローバル人材の育成を推し進めていきます。

取材・文/児山雄介 撮影/亀井宏昭